

[中国の陶磁展によせて]

「素三彩三果文皿」と清朝陶磁

このたびの展観で、清時代「素三彩三果文皿」が初めて公開されますので、その作品の紹介と、清朝陶磁について解説させていただきます。

まず、当館の中国陶磁コレクションについてそのあらましを述べますと、総数は約250点、ちなみに館蔵品をジャンル（種類）別にした場合、中国陶磁が一番点数が多いのですが、この中で清朝の作品は数にして20数点です。意外に少く、従って当館の中国陶磁コレクションとして、よりその充実に力を入れなければならない分野だと思われま。

清時代の陶磁は「神工鬼斧の極みをつくした」といわれる清朝官窯の作品を中核として、本国は言うに及ばず、欧米諸国においても高い評価を与えられております。しかし、我国ではその鮮麗にして精緻な作行が日本人の好尚に合わなかったのでしょうか、一般的にはあまり人気がありませんでした。そのためか、これまでは国内の清朝陶磁コレクションは当館に限らず比較的質量ともに劣る分野であったと言えますが、近年、その価値が見直され、美術館や愛陶家の間で目覚ましい蒐集が計られてい

るようです。

清代の康熙・雍正・乾隆年間(1662～1795)は中国の陶磁器の発展がある意味では最高潮に達した時代と言えましょう。特にその彩磁(多彩な文様を施した磁器)は明代からの伝統である五彩、豆彩、素三彩などを継承して豊富かつ多様な展開を見せています。例えば、五彩には濃厚な黒彩が加わり、更に上絵付の藍彩が下絵付の青花にとってかわるなど、種々な技法の発達が見られています。また、金彩を広い面積に施して、光り輝く金碧の効果を上げる新しい工夫もあみだされました。

色調の点では、紅・緑・紫などが一様に深淺の階調をつくり出せるようになり、例えば緑色の深淺さによって群山の遠近、樹木の老若が容易に表現出来るわけです。このように色彩を豊富に発色させることによって、様々な主題を一層写實的に、緻密に表わすことが出来るようになりました。

この時代の新しい作品には粉彩・珐瑯彩・素三彩などがあります。前二者はともに康熙年間にはじまり、雍正(1723～1735)、乾隆(1736～1795)のころに完成しましたが、粉彩は中国の伝統的な着色画と同

様な効果をそなえています。

粉彩は、まず瑠璃白(ガラス質の白い顔料)を用い、次に瑠璃白の上に文様を色釉、例えば紅は粉紅、緑は淡緑、という具合に用いて描きます。その色調は淡雅であり、従来の五彩の濃艶な効果と比べて、はるかにすぐれていると言えます。

珐瑯彩は珐瑯の顔料を用いますが、もっぱら銅胎の珐瑯器皿を模倣しています。銅胎画の珐瑯と区別するために、清の皇室では、これを磁胎画の珐瑯と称していました。雍正の時にあって、珐瑯の顔料で白釉の磁面に作画するようになりましたが、これは粉彩の磁器と同じ技法で作られたものでした。

素三彩は白磁胎の地肌、白釉・黄釉・緑釉・藍釉などの色釉を直接塗って文様を描き、中火度(半強火)で焼きあげた色絵磁器です。焼上りは色地五彩などと同じように見えますが、釉上着色ではなく、素地着色であるため、特別に「素三彩」の呼称を与えられています。この母胎は、明の黄地緑彩磁や黄万曆などと考えられますが、清朝官窯はそれらに多くの改良や洗練を加えて独特のジャンルにまで昇華させたと言えましょう。素三彩

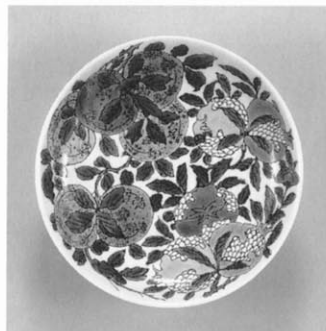
で注目される特色は、その色釉が色絵を構成する彩料であると同時に、磁胎をおおう釉薬の働きをも兼えている点です。

ここでご紹介する当館の新収品「素三彩三果文皿」はその素三彩の典型的な作例と言えます。類品は幾点かが既に知られていますが、それらの中でも秀逸な作行の、新出の作品です。類品の主なものは台北市の国立故宮博物院、東京国立博物館、出光美術館、及び我国の個人二名の所蔵になる作品です。この皿は径が25.0センチ、高さが3.7センチで、他の類品もほぼ同寸で、文様の図柄も似かよったものですが、全く同じものはありません。見込には色釉下の素地に型押しで竜が暗花風に表わされています。この竜は官窯の一つの証しである五爪の竜ですが、この暗花の文様が三彩釉の釉肌に微妙な光沢を招き、鉛釉の虹彩の効果を高めています。ただ、この暗花の竜文はその上に施された三彩の図文とは関係のない一種の地文として用いられているのが興味を引きます。

三彩による文様は石榴・桃・柑橘、又は枇杷ともみられる果実ですが、これらは各れも靈果と呼ばれる吉祥を象徴する果物です。石榴は子福、桃は長寿、枇杷は葉と種子が薬用に供されるところから、やはり長寿の吉祥果とされています。これらの三果文が黄・緑・紫の三色釉で描かれ、その周辺部にはやはり暗花で玉取りの双竜が表わされています。また、皿の外側の周辺には牡丹と山茶花の折枝が二ヶ所に三彩釉で描かれ、高台内には青花で「大清康熙年製」銘が二重円圏内に書かれています。

(吉田宏志)

素三彩三果文皿 清時代



同 裏面



季刊 美のたより No.95

平成3年5月16日

発行 大和文華館